

## エビデンシャリティから見た「テイル」

定延 利之（京都大学）<sup>1</sup>

## 1. はじめに

現代日本語共通語（以下「日本語」）の文末の時間的表現は、膨大な研究の蓄積があり、先導的な位置にあった研究者からも「事実ほぼ観察し尽くされた」旨の発言が出ている。下の（1a）は、いわゆる「ムードの「た」」（心的態度を表すように見える「た」）について、（1b）はテンスとムードの関係についての発言である。

（1） a. 事実はすでにこれまでにほとんどあげつくされていると思われる

[寺村 1984 : 105]

b. 標準語だけに限ればほぼ事実は出揃ってしまっている [工藤 2002 : 27]

だが、これらの発言とは裏腹に、文末の時間的表現はその後、新たな現象の指摘が続き、研究はさらに進展している。なぜそれが可能だったのか？

それは、言語表現が状況に応じて自然さを変える様子が、井上（2001）以降、説の根拠として重視されだしたからである。さらに、現象の説明原理として、「テンス・アスペクトの体系」の外にも妥当する、一般性の高いものが求められるようになってきたからでもあるだろう。テイルを具体例として、このことを論じたい。

## 2. 前提：伝統的に認められてきたテイルの用法

伝統的に、テイルには主に 3 つの用法が認められてきた。それらは「継続・くり返し」（例（2））、「パーフェクト」（例（3））、「経験・記録」（例（4））である。

（2） a. 彼はいまあそこを走っている。（継続）

b. 彼は毎日あそこを走っている。（くり返し）

（3） 彼はもう死んでいる。（パーフェクト）

（4） a. 彼はああ見えて、実はロス五輪で走っている。（経験）

b. 調べてみると、確かに昔、ここに市電が走っている。（記録）

「くり返し」を「継続」と同じ類とすることについては、大鹿（1982:94）や国立国語研究所（1985:90-91）にしたがう。以下「継続」とは両者を含めたものとする。

「パーフェクト」の定義については、広く知られた Maslov（1988: 64-65）を採用し、原因－結果のように先行段階・後続段階という 2 段階を含んだ意味を持つ動詞（句）の形式、それだけにアスペクトの範疇にすんなり入るわけではないもの（Comrie 1976, 浅利 2016）とする。前景化されているのが先行段階（actional perfect）か、後続段階（statal perfect）かはここでは区別せず、広く「パーフェクト」とする。寺村（1971/1984）をはじめ、一部で持ち出される「完了」「結果」「ペルフェクト」は actional perfect と statal perfect のいずれかあるいは両方に相当すると見なし、「パーフェクト」に含めておく。

<sup>1</sup> sadanobu.toshiyuki.3x@kyoto-u.ac.jp

「経験・記録」は「完了」の一種とされることもあるが（大鹿 1982 : 96-97）,「アスペクトから解放されたもの」（国立国語研究所 1985）とされることもある。ここではこれを論の都合上,「完了」に含めず両者を区別しておく。

一般にアスペクトとして理解されているテイルの用法とは,「継続」用法と「パーフェクト」用法である。以下,これらの用法について,アスペクト的な理解の問題を指摘し,エビデンシャルな把握が問題を解消することを示す。これらの用法が,「経験・記録」用法や,一部で指摘される「単なる状態」用法（例（5））とどうつながり,

（5）彼の絵のうまさはずばぬけている。

テイルの意味の中におさまるのかも併せて論じる。

### 3. 仮説

ここで紹介する発表者の仮説は,テイルの意味は「観察すればこのようなデキゴト情報が得られる状態だ」というものである（定延 2006, 定延・マルチュコフ 2006, Sadanobu and Malchukov 2011）。この仮説は「すれば」という仮想的な形ではあるが,「観察」という情報獲得手段を持ち込んでいる点で,エビデンシャルな仮説と言える。

この説にとって,次の（6a-d）が自然であることは,障害に思えるかもしれない。

（6）a. 宇宙はいまも膨張している。

b. 原子の中では陽子と電子が激しく回っている。

c. 今頃 2 人の遺体は溶鉱炉の中で気化しているな。

d. あの星は 3 億年後も白色矮星にならず輝いている。

だが,これは「観察可能」というイメージが科学技術の進展により空間的・時間的に拡張されたものであり,問題は無い。発表者が考える「観察」は仮想的なものであって,話し手が発話に先立ち現実におこなう必要は無いからである。

「観察可能」のイメージが空間的・時間的に拡張される一方,原理的に観察不可能な場合も 2 種残っている。それらのデキゴト表現にテイルは現れない。

2 種のうち 1 種は,抽象的な場合である（例（7））。

（7）a. [線路について] 2 本の平行線はどこまでも交わずに伸びている。

b. [公理について] 2 本の平行線はどこまでも交わずに伸びている。

このことは以前から知られており,幾何の公理は「時を超えて成り立つ」から,などと理解されているようだが,「時を越えて成り立つ」というレトリックが「絶えず継続して成り立っている」と言うことと実質どう違うのかを説明するには,結局は観察可能性を持ち出して「幾何の公理のような抽象的な領域は観察可能ではない」とせざるを得ない。これはすでにエビデンシャルな説明である。

観察が原理的に不可能なもう 1 種は,観察対象が存在しない場合である（例（8））。

（8）[人や動物が中にいない実験室について]

さあ,いま,あの実験室内の照明をリモコンで切りました。これで実験室の中は真っ暗で,

- a. 何も見えません。
- b. ?何も見えていません。

実験室内に人や動物がいない（と話し手が思っている）なら、(a) は自然だが (b) は不自然である。テイルは観察対象（「何も見えない」と観察される者）を必要とする。

以上の 2 種の場合にテイルが不自然であることを、純粹にアスペクトの観点から説明することは困難である。もちろん、英語の例 (9a) は「手紙を書く様子を話し手は見た」と解釈されやすいように、アスペクト的な意味は時にエビデンシャルな解釈をもたらす。だが、例 (9b) では同様の解釈は優勢でないように、それはキャンセル可能な含意 (implication) にすぎない。

- (9) a. He is writing a letter.    b. He is writing a dissertation.

日本語の (7b) (8b) の不自然さは確固たるもので、含意のキャンセルとは一線を画している。

#### 4. テイルの「継続」用法はアスペクト的なものか？

内部状態の表現において、テイルの必要性は人称の影響を受ける。自己 (1 人称) の内部状態は、テイルありの表現 (例 (10a)), テイル無しの表現 (例 (10b)) が共に自然だが、他者 (2・3 人称) の内部状態は、テイル無しの表現は不自然である (例 (11)) (Iwasaki 1993: 22-23, 柳沢 1994: 166-167, 定延・マルチュコフ 2006: 157)。

- (10) a. 私はまだ膝に痛みを感じている。
- b. 私はまだ膝に痛みを感じる。
- (11) a. 彼はまだ膝に痛みを感じている。
- b. ?彼はまだ膝に痛みを感じる。

この現象 (通称「人称制限」) は「他者の内部状態は知り得ない」という普遍的真理だけでは説明し尽くせない。他言語 (英語) には類似点 (例 (12)) だけでなく相違点 (例 (13)) もあるからである。普遍的真理をどのように反映するかは言語ごとに異なる。

- (12) a. It seems to me that you are crazy.
- b. \*It seems to Pete that you are crazy.    [寺村 1982 : 149]

- (13) a. ?彼はうれしい。
- b. He is happy.

テイルの「継続」用法を文字通り継続とアスペクト的に考える限り、人称制限は理解し難い。だが、これをエビデンシャルに考えると、人称制限はケチュア語やツカノ語と同様に理解できる (定延・マルチュコフ 2006)。ケチュア語では、内部状態を表す動詞（「悲しい」「疲れている」などに相当）は、1 人称では直接的なエビデンシャルを要求し、非 1 人称では間接的なエビデンシャルを要求する。ツカノ語では、非 1 人称の内部状態の表現には視覚的なエビデンシャルや推量のエビデンシャルが現れるが ((14)), 1 人称の内部状態の表現には、非視覚的なエビデンシャルが現れる ((15))。

- (14) (Péduru) do' âti-gi' weé-mi  
 (Pedro) be.sick-NOM.MASC. do/be-PRES.NONVIS.3sg.masc  
 ' (Pedro) is sick' (I can see he is) [Aikhenvald 2004: 236]

- (15) do'âti-gi' weé-sa'  
 be.sick-NOM.MASC. do/be-PRES.NONVIS.nonthird.p  
 'I am/feel sick' (non-visual) [Aikhenvald 2004: 235]

なお日本語の場合、テイルの要・不要を隔てる境界線は、「人称」の区分（自己 vs. 他者）と厳密には一致しない部分がある。過去の内部状態を述べる場合、境界線は「感じる自己」と「考える自己」の間に引かれる（定延 近刊）（例（16）（17））。

(16) 現在の内部状態を述べるなら境界は自己と他者の間。

- a. 私は故郷を恋しく思います。[感じる自己]
- b. ?彼は故郷を恋しく思います。[感じる他者]
- c. 私はチリの首都はサンティアゴだと思います。[考える自己]
- d. ?彼はチリの首都はサンティアゴだと思います。[考える他者]

(17) 過去の内部状態を述べるなら境界は「感じる自己」と「考える自己」の間。

- a. 結婚するまでは私も故郷を恋しく思いました。[感じる自己]
- b. ?結婚するまでは彼も故郷を恋しく思いました。[感じる他者]
- c. ?高校に入るまでは私はチリの首都はリマだと思いました。[考える自己]
- d. ?高校に入るまでは彼はチリの首都はリマだと思いました。[考える他者]

ここに反映されているのは、「あの時代のあの思い」はいまでも直接感知しやすいが、「あの時代のあの考え」は、いまでは直接感知されにくいという認識論的な違いである。これはエビデンシャルな形以外では理解し難いだろう。

## 5. テイルの「パーフェクト」用法はアスペクト的なものか？

モノの変化後状態を目の当たりにしつつ「モノが変化した」と言う行為は、誰にでもできることではない（鈴木 1979, 井上 2001）。たとえば、初めて通された応接室に水槽があり、そこに金魚の死骸を見つけても、(18a) のようには言いにくい。死んでいる金魚は必ず死んだものと、誰しも確信できるにもかかわらず、である。金魚の死骸を見て「死んだ」と言いやすいのは、生前の金魚を見ていた者、典型的には飼い主である。

(18) [初めて通された応接室で、水槽に金魚の死骸を発見して独り言]

- a. あ、金魚死んだ。
- b. あ、金魚死んでる。

このような一部の話し手の特権性は「体験者の特権性」として、数種の例外も含めて光が当てられつつある（羅希・定延 近刊, 定延（編） 近刊）。

その一方で、テイル発話にはこうした制限が無く、(18b) は誰にとっても自然である。このことはテイルの「パーフェクト」用法を純粋にアスペクト的に（つまりパー

フェクトとして）とらえようとする問題になる。「あるデキゴト（例：金魚の死）が過去に生じた」と言うことには（(18a)）制限があるのに、「あるデキゴトが過去に生じ、その影響が現在に及んでいる」（(18b)）と言うことに制限が無いとは、説明し難いだろう。

## 6. テイルの 2 用法とデキゴトタイプ（動作 vs. 変化）との連動

以上で取り上げたテイルの 2 用法の違いは、動詞タイプの違いと連動するとされている。その先駆的な研究は、「継続動詞」のテイル形が「継続」用法に、「瞬間動詞」のテイル形が「パーフェクト」用法になるとした金田一（1950; 1976: 8）だが、この動詞タイプはその後、名称こそ「動作動詞」「変化動詞」に改められたものの、内実は「動作」とは運動の形態、「変化」とは運動の内容」という暫定案が出されたまま（奥田 1977; 1985: 102-103）、なおざりにされている。

本発表では、動作・変化を動詞ではなくデキゴトのタイプとし、動作を「デフォルト状態からの逸脱」と定義する。この定義は、デキゴトがデフォルトから逸脱した特異なものとイメージされると、そのデキゴトのテイル表現が「継続」用法らしくなり、期間表現の生起（これはテイル形の「継続」用法とは別に、動作表現の特徴とされる）が自然になること（例（19））を理解する上で有効である。

(19) a. ?鎖が 3 時間切れる。

b. この地震で、首相とのホットラインが 3 時間切れた。

動作をこのように定義すれば、デキゴトの連続や多発が動作らしさを高めることにも（例（20）（21））、説明がつけられる。

(20) 支持率がこの 2 週間ゆっくり上がっている。[連続]

(21) 往年の名優がこの 2 年間どんどん亡くなっている。[多発]

連続や多発は、「程度」という明確なデフォルト値（ゼロ）を持つドメインを意識させるからである。「程度」のデフォルトがゼロであることは、いわゆる「意外のモ」（澤田 1991, 定延 1995）で確かめることができる。肯定文において程度表現に意外のモが付くと、解釈は決まって「意外に大きな程度」になる（例（22））。

(22) 10 人も来た。

変化については日常語の「変化」と同様、「直前状態からの逸脱」と定義する。この定義に基づけば、話し手の探索意識（どのような様子だろう、調べようという注意意識）がデキゴトを変化らしくすることが次のように理解できる：あるモノに対する話し手の探索意識が高まれば、そのモノのデキゴトは話し手にとって、「自分が注視していた直前状態からの逸脱」という変化の形で述べやすくなる（例（23））。

(23) a. あ、走った。

b. あ、走ってる。

窓の外を見るとグラウンドを運動選手が走行中だったという場合、(a) は (b) とは異なり不自然である。だが、あの野球選手は盗塁の世界記録をいつ塗り替えるかと気にし

つつ、テレビのチャンネルを切り替えたところ、走塁中のその選手が画面に映ったという場合、問題の走行は変化らしくなり、(a) は先述の (18a) 「あ、金魚死んだ」と似て自然である。デキゴトの変化らしさに探索意識が貢献することは、「た」とは別に、中国語の奪格前置詞“从” (cóng) にも見られる。中国語ではモノの消失の表現には“从”は現れにくく、「籠の中の鳥がいなくなった」とは言っても「籠から鳥がいなくなった」とは通常言わないが、奇術の描写では探索意識が高く、“从”は自然である (王 2009 : 46)。

(24) 一眨眼, 鸟 竟然 从 笼子里 没了。

yīzhǎyǎn niǎo jìngrán cóng long-zi-lǐ méi-le

またたく間に 鳥 なんと から 籠の中 いなくなった

「またたく間に鳥がなんと籠の中からいなくなった」 [王 2009 : 46]

以上のようにテイルの「継続」用法と「パーフェクト」用法の自然さは、「連続」「多発」のイメージや探索意識に影響される。このことは、2 用法を純粹にアスペクト的にとらえると理解できない。だが、「状態の観察」に基づきテイルの意味をとらえれば、動作は始発状態が一般的なデフォルト状態であるため、1 状態しか観察しなくともそこに見出され得る（「継続」用法）が、変化は始発状態が直前状態であるため、1 状態しか観察しなければ痕跡の形でしか（「パーフェクト」用法）、見出されないと理解できる。

## 7. テイルのアスペクト的な把握で説明できることの回収

テイルのアスペクト的な把握で説明できることは、エビデンシャルな把握でも説明できる。テイルの意味を「状態の観察」に基づきとらえた場合、「継続」用法は、補外 (extrapolation) という推論操作で導ける。補外はテイルとは別の表現 (例 (25a) → (25b)) にも関わる一般的なものである。

(25) a. 気温はいま 20 度である。

b. 気温は 1 秒前も、1 秒後も 20 度である。

「1 状態の観察」に基づく把握は、「継続」用法からこぼれ落ちる、1 状態のテイル (例 (26)) をも救える。このような 1 状態のテイルは、特殊な動詞タイプ (いわゆる「第 4 種の動詞」。例 (5)) に限られるわけではない。

(26) [雷の写真を見て] わ、光ってる。

テイルの「パーフェクト」用法と「経験・記録」用法は、帰属 (attribution) という、状態連鎖のまとめ上げに関わる認知操作によって「1 状態の観察」から導ける。状態連鎖のまとめ上げには 2 方式があり、デキゴト情報もそれに応じて 2 方式で管理される。

状態連鎖を複数個のセッションにまとめる場合、デキゴト情報は「スコアボード方式」で管理される。たとえば静止中の人物について「2 回走っている」と言えたり、その後で「まだ 1 回も走っていない」と言えたりするのは、「練習」そして「試合」と

いうまとめ上げの中での、デキゴト情報〔走り〕のスコアボード方式の管理による。

状態連鎖を単一の巨大セッションにまとめる場合、デキゴト情報は「閻魔帳方式」で管理される。静止中の人物について「54739 回走っている」などと言えるのは、「生涯」という単一巨大セッションにおける、デキゴト情報〔走り〕の閻魔帳方式の管理による。

回数表現の場合と、セッション境界が必ずしも一致するわけではないが、テイルも、デキゴト情報がスコアボード方式で管理されれば「パーフェクト」用法が得られる。そして閻魔帳方式で管理されれば「経験・記録」用法が得られる。

## 8. おわりに

ここで述べたテイルのエビデンシャルな把握は、すべて筆者の独創というわけではない。テイルの意味を状態にとらえる考え（井上 2001; 2004）に触発されたところが大きく、また、その「イル」場所を基本的に眼前にとらえる考え（小柳 2014）とも近い。さらに言えば、アスペクト的な考えを受容する説の中にも親和的なものはある（大鹿 1982）。本発表に仮想敵があるとすれば、それはこれらではなく、「事実はほぼ観察し尽くされた」という諦観（(1)）である。この諦観を打破し、「テンス・アスペクト」という時間表現研究の伝統的枠組みを超えて、時間表現のよりリアルな意味・用法に迫る方途を世界に示してみせることが、研究者に恵まれ、膨大な研究の蓄積を持つ日本語研究のこれからの使命ではないか。本発表ではその方途として、「状況ごとの表現の自然さを観察すること」と「時間表現の外に類似現象を見出し、テンス・アスペクトを超えた一般原理を求めること」の 2 つが有効であることを、テイルを題材に示そうとした。

## 言及文献

Aikhenvald, Alexandra Y. (2004). *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

浅利誠（2016）「言文一致体成立「以後」の日本語の時間表現」『iichiko』第 130 号, 13-39.

Comrie, Bernard. (1976). *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*.

[バーナード・コムリー『アスペクト』, 山田小枝（訳）, 東京：むぎ書房, 1988]

井上優（2001）「現代日本語の「タ」——主文末の「…タ」の意味について」つくば言語文化フォーラム（編）『「た」の言語学』97-163. 東京：ひつじ書房.

井上優（2004）「「主題」の対照と日本語の「は」」益岡隆志（編）『主題の対照』215-226, 東京：くろしお出版.

Iwasaki, Shoichi. (1993). *Subjectivity in Grammar and Discourse: Theoretical Considerations and a Case Study of Japanese Spoken Discourse*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』[金田一春彦（1976 編）『日本語動詞のアスペクト』5-26. 東京：むぎ書房]

小柳智一（2014）「古代日本語研究と通言語的研究」定延利之（編）『日本語学と通言語的研究

- との対話——テンス・アスペクト・ムード研究を通して』55-82. 東京：くろしお出版.
- 工藤真由美 (2002) 「文法 (理論・現代)」『国語学』第 53 巻第 4 号, 22-29.
- 羅米良 (Luo Miliang)・定延利之 (近刊) 「逸脱としての動作と変化」益岡隆志・高山善行・定延利之・井上優 (編) 『テキストと時間 (仮)』東京：ひつじ書房.
- 羅希 (Luo Xi)・定延利之 (近刊) 「「た」形変化文を発する権利のありか」益岡隆志・高山善行・定延利之・井上優 (編) 『テキストと時間 (仮)』東京：ひつじ書房.
- Maslov, Jurij S. “Resultative, perfect, and aspect.” In Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Typology of Resultative Constructions*, 63-85. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins,
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階」『国語国文』第 8 号 [奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』85-104, 東京：むぎ書房]
- 大鹿薫久 (1982) 「未完了・完了・未来・過去——終止法の述語における」『山邊道』第 26 号, 87-102.
- 定延利之 (1995) 「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・沼田善子・野田尚史 (編) 『日本語の主題と取り立て』227-260. 東京：くろしお出版.
- 定延利之 (2003) 「基準設定からみた動作動詞と変化動詞」『日本認知科学会第 20 回大会発表論文集』20-21.
- 定延利之 (2006) 「心内情報の帰属と管理——現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』167-192. 東京：くろしお出版.
- 定延利之 (2016) 『コミュニケーションへの言語的接近』東京：ひつじ書房.
- 定延利之 (近刊) 「体感度の高さに動機づけられる「て (い) る」「た」に関する覚え書き——世界モデルへの潤色を通して」庵功雄・田川拓海 (編) 『日本語のテンス・アスペクトを問い直す』2. 東京：ひつじ書房.
- 定延利之 (編) (近刊) 『発話の権利』東京：ひつじ書房.
- 定延利之, アンドレイ・マルチュコフ (Andrej Malchukov) (2006) 「エビデンシャルティと現代日本語の「ている」構文」中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』153-166. 東京：くろしお出版.
- Sadanobu, Toshiyuki, and Andrej Malchukov. (2011). “Evidential extension of aspecto-temporal forms in Japanese from a typological perspective.” In Tanja Mortelmans, Jesse Mortelmans and Walter De Mulder (eds.), *In the Mood for Mood*, 141-158. Amsterdam; New York: Rodopi.
- 澤田 (山中) 美恵子 (1991) 「「も」の含意について再考——数量詞+「も」を中心に」KANSAI LINGUISTIC SOCIETY 11, 21-30.
- 鈴木重幸 (1979) 「現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語につかわれた完成相の叙述法 断定のばあい」言語学研究会 (編) 『言語の研究』5-59. 東京：むぎ書房.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』東京：くろしお出版.
- 王軼群 (Wang Yiqun) (2009) 『空間表現の日中対照研究』東京：くろしお出版.